

2010年
7月5日
月曜日

私たちは、毎日あるいは刻々とさまざまな情報に否応もなくさらされている。しかもその情報は私たちへの「呼びかけ」として侵入してくるから、無碍に無視することができない。

私は日に何度か、朝起きたとき、勉強に疲れて一息入れるとき、大学から帰宅した時などにパソコンのメールを開く。緊急を要するものから、どうでも良いようなメールまで沢山くるが、電子メールの長所である機敏性は、返事の即応性を暗黙のうちに表示している。私も送り主がすぐの返事を期待しているだろうと想像してしまう。そのためゆっくると考えて返事することよりも、即答することが礼儀と思うようになってしまった。また「ペーパーレス」をうたい文句にして、大学や学部からの正式の連絡や会議の案内などもほ

竹本 洋 教授（経済学史）

眠るじよ、眠られるじよ

とんどがメールになってしまった。それを見落とすと職務怠慢とみなされ、ゆくゆくは懲戒の対象になるかも知れない。学生諸君もパソコンを通じて授業登録をしたり、授業の資料などをえたりすることが多くなつたし、友人等の連絡であれば携帯電話は必須なっているだろう。私は携帯電話をもつてはいるが、常時身につけていないために、電話をもらったことに後になってから気づくという失敗をおかす。

このようにパソコンや携帯電話にたえず注意を払っておかないと仕事でも私事においても支障をきたすようになってしまった。そのため私の生活はところ構わない頻度の多い呼びかけにさらされ、いつのまにかパソコンや携帯電話のもつ早いリズムに影響を受けている。始末の悪いことに、私自身もそのリズムや呼びか

けにできるだけ順応しなければ、と自分で自分をいつのまにか眠らせている。しかし私の体も心も奥深いところでそれに違和感を感じ、息の長いリズムを取り戻したい、無遠慮で暴力的な呼びかけを無視したい、と叫んでいる。みなさんのなかにも同じ思いの人がいるかもしれない。携帯電話やパソコンを完全に拒否することはできなくても、せめて生活のなかにこれらのテクノロジীরリズムとは違う自分のリズムを確保したい。そのために長い時間を要する読

書をするのも一案である。電子書籍の未来はまだ不明だが、手に伝わる本の重み、ページを開いたときのインクのかすかな匂い、ページの余白部分の余裕と落ち着き、そして美しい装丁を楽しみつつ、すぐには読み通せないような、たとえばダンテの『神曲』やゲーテの『ファウス

ト』をゆっくりと時間をかけて読もう。その他にも読むに値する本はたくさんあるが、それがニーチェであっても、ドストエフスキーであっても、もちろん『国富論』であつてもかまわない。そうした斜め読みを許さない本を探し当て、それを「自分のリズム」で読むことは、自分で自分を縛っているもの（自縄自縛）からわが身を解放することになる。そしてただむやみに「スピードが大車」と眠られないための防波堤にもなる。